

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01284

研究課題名（和文）外国語教育研究における再現可能性の検証と新たな研究領域の創出

研究課題名（英文）Assessing reproducibility in foreign language education research and creation of new research domains

研究代表者

鬼田 崇作（Kida, Shusaku）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：00611807

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトの目的は、外国語教育研究に属する諸領域の代表的先行研究について、その結果の再現可能性を検証することである。実証研究においては、過去の研究結果の再現可能性を検証することは重要であるものの、当分野ではこれまでそのような試みが十分になされていない。そこで本研究では、ベイズ統計の手法によって先行研究の再現可能性の程度や不確かさについて検証を行った。その結果、細部において元の研究結果が再現されないことはあったが、主要な研究結果については、多くが再現されることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語教育に関する研究結果は、現実の教育場面における意思決定に直接的に結びつく可能性があるため、研究結果の再現可能性を問うことは研究の本質そのものである。本研究プロジェクトの結果、外国語教育研究においては、様々な領域で先行研究の主要な結果は再現されることが示された。これらの先行研究で用いられている研究方法は、各領域で一般的な研究手法であることから、本プロジェクトで再現可能性を検証する対象とはなっていない他の先行研究においても、同様の結果が得られることが期待でき、現実の教育実践における意思決定に有効な情報を提供しているであろうことが示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to examine the reproducibility of the results of major previous studies in various fields of foreign language education research. Although it is important in empirical research to examine the reproducibility of the results of previous studies, such attempts have been insufficient so far in this field.

In this study, we examined the reproducibility and previous studies using the Bayesian analysis framework. As a result, it was shown that, although there were some minor cases where the original research results were not reproduced, most of the major research results were reproduced.

研究分野：英語教育学

キーワード：外国語教育 再現可能性 追試

1. 研究開始当初の背景

本プロジェクトの背景としては、主に以下の2点を挙げることができる。1点目は、心理学における再現性問題である (Open Science Collaboration, 2015)。心理学においては、研究結果の再現性を低くしている原因のひとつとして、実験やデータ分析などの研究方法が挙げられている。外国語教育研究の研究方法の多くは、心理学において発展してきたものを受け入れているため、外国語教育研究においても、研究結果の再現性は低くなることが懸念される。そこで、外国語教育研究においても先行研究の再現可能性を確かめることは重要である。

2点目は、計算機の発達による、データ分析手法の高度化である。外国語教育研究は、階層性があるデータ、系統的な外れ値があるデータなど、複雑なデータを分析対象とすることも多い。このようなデータには、従来多く用いられてきた t 検定や分散分析などの単純な統計モデルは不適切であり、より高度で複雑な分析手法が求められる。近年の計算機の発達や R およびそのパッケージなどのデータ分析環境が整備されたことにより、マルコフ連鎖モンテカルロ (MCMC) 法に基づく複雑な統計モデルのベイズ推論などが一般に利用できるようになってきているため、これまでの外国語教育研究ではあまり用いられていないデータ分析方法を用いた新しい研究が可能になっている。

2. 研究の目的

以上の背景より、本プロジェクトでは、外国語教育研究において主要な研究領域における代表的な先行研究の再現可能性について、現代的なデータ分析手法を用いて検討を行う。本研究の目的は、外国語教育研究に属する諸領域の中心的先行研究の結果について、様々な観点から再現可能性を検証することである。

3. 研究の方法

【リーディング研究】

リーディング研究としては、外国語でのリーディング能力には語彙知識の広さと深さが重要な要因であることを示した Qian (2002) について、その結果をシミュレーションで再現したデータによって再計算を行った。Qian は、母語の異なる 217 名の英語学習を対象に、リーディング力の測定として TOEFL のリーディングセクションの問題、語彙知識の広さを測るテストとして Vocabulary Levels Test (Nation, 1983)、語彙知識の深さを測るテストとして Vocabulary Knowledge Scale (Qian, 1998) を実施した。また、1995 年以前に使用されていた TOEFL の語彙問題も合わせて実施した。

本プロジェクトでは、Qian (2002) において報告されている記述統計結果をもとにデータを再現した上で、説明変数を以下の順に投入した回帰モデルをデータにフィットさせた。

【ライティング研究】

ライティング研究としては、Koltovskaia (2020) の追行研究を行った。具体的には、日本人英語学習者が自動ライティング訂正フィードバックを用いる際のエンゲージメントを分析することで、英語ライティング学習への影響を調査した。調査方法としては、日本人大学生及び大学院生計 5 人を対象に、与えられたトピックに対するライティング課題を英語で行ってもらい、その後、Grammarly を用いて自分の書いた文章を修正した。ライティング及び修正の様子は画面収録された。また、修正後に刺激再生法、半構造化インタビューを行った。

【スピーキング研究】

スピーキング研究としては、日本語母語話者が外国語 (英語) を話すことに慣れ、流暢さを高める活動を行うことにより、達成感を得てスピーキングへの抵抗感を軽減させることができるとする磯田 (2009) の追試を行った。磯田は、Willingness to Communicate の枠組み (MacIntyre et al., 1998) に基づき、大学生のスピーキングに対する抵抗感を「回避」、「不安」、「能力認知」の 3 つの因子で捉え、週 1 回、3 週間のスピーキング授業において、スピーキングの流暢性を高める活動として Sentence Per Minute (Soresi, 2005) を行ったところ、指導の前後において、3 因子のいずれも低くなることを示した。

本プロジェクトでは、大学生 134 名 (全 6 クラス) を対象に、磯田 (2009) と同様の指導手順、内容、データ収集によって調査を行い、各クラスの結果をもとにベイジアンメタ分析を行うことによる直接的追試を行った。

【リスニング研究】

リスニング研究としては、外国語のリスニング時に学習者が用いる方略を分類し、方略使用と習熟度との関連を示した Vandergrift (1997) の概念的追試を行った。Vandergrift の研究では、英語を母語としフランス語を学習する高校生 21 名を対象に、フランス語の音声を聞く際の方略について、think-aloud 法により言語報告を求めた。報告されたリスニング方略について、その種類

の分類、頻度、習熟度との関連を調査した結果、全体的に、精緻化・要約・推測などの方略使用は頻度が高いこと、初級レベルの学習者は訳、転移、繰り返しなど表面的な方略使用が多い反面、中級レベルの学習者はより深い方略やメタ認知方略使用が多いことが報告された。

本プロジェクトでは、日本語を母語として英語を学ぶ高校2年生72名、大学生22名を対象に、英語音声を聞いた際のリスニング方略についての回顧報告を求めた。その結果について、予測変数を方略の使用数、固定効果を習熟度およびリスニングの題材、変量効果を各変数および切片の分散とするベイズ回帰分析をフィットさせた。

【学習方略研究】

学習方略研究として、Tseng et al. (2006) によって開発された語彙学習の自己調整能力を測定する尺度「Self-Regulating Capacity in Vocabulary Learning (SRCvoc)」を用いた追試を行った。Mizumoto and Takeuchi (2012) など様々な国での追試を通じて、SRCvoc の因子構造が一致しないことが判明していたため、従来の検証的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis: CFA) の問題を克服する新しい手法「Confirmatory Composite Analysis (CCA) (検証的合成分析)」を用いて分析を行った。

本プロジェクトでは、中国人英語学習者703名が、Tseng et al. (2006) で使用された SRCvoc の同じ項目に同じ手順で回答し、分析を行った。

【動機づけ研究】

動機づけ研究としては、現在の第二言語習得における動機づけ研究の代表的な理論的枠組みである L2 Motivational Self System (L2MSS) が学術界で広く参照されるようになったきっかけといえる Taguchi et al. (2009) の研究の追試を行った。対象は日本国内の大学に在籍する英語学習者411名(留学生12名を除く399名、男性208名、女性191名、平均年齢19.28歳)であった。調査には、Taguchi et al. (2009) と同様の質問紙(10個の構成概念からなる計42項目の質問紙、すべて6件法)を用いた。データ分析は、Taguchi et al. (2009) と同様に、(a) integrativeness と L2MSS における ideal L2 self の関連性、ならびに instrumentality (promotion/prevention) と ideal/ought-to L2 self の関連性を相関分析で検証し、(b) L2MSS を構成する3つの要素 (ideal L2 self, ought-to L2 self, L2 learning experience) 間の関連性を構造方程式モデリングで検証した。

4. 研究成果

【リーディング研究】

WAIC および決定係数によるモデル比較の結果、最も妥当なモデルだと判断したモデルの推定結果は表1のとおりである。

表1 モデルの推定結果

係数	事後平均	事後標準偏差	信用区間下限	信用区間上限	\hat{R}
切片	-20.87	3.37	-27.44	-14.07	1.00
DVK	0.26	0.03	0.20	0.33	1.00
VS	0.16	0.04	0.07	0.24	1.00
TOEFL_VIM	0.10	0.03	0.05	0.16	1.00
σ	1.32	0.06	1.20	1.45	1.00

注. TOEFL_RBC は TOEFL のリーディングセクション、VS は語彙の広さ、DVK は語彙の深さ、TOEFL_VIM は TOEFL の語彙問題の再現データを表す

分析の結果、リーディング研究においては、Qian (2002) の再計算を行い、リーディング能力においては、語彙知識の広さと深さの両方と関連が認められるという元研究の結果が概ね再現されることが示された。

【ライティング研究】

収集した映像及び音声データから学習者のエンゲージメントを行動的・認知的・感情的エンゲージメントの3つの観点から分析した。その結果、行動的エンゲージメントに関して、修正にかかった時間と適切なフィードバックを受け入れた割合は参加者によって異なった。認知及び感情的エンゲージメントに関して、フィードバックの種類によって学習者は異なる印象を受けていた。また、学習者は Grammarly のフィードバックを十分に活用できていない可能性が示唆された。具体的には、Grammarly は文法に関する判断は得意だが、文脈に関する判断は苦手であるという特性に合わせて、学習者の Grammarly への信頼度はフィードバックの種類ごとに異なっていた。またフィードバックへの信頼度に加えて、書いた文章への自信も参加者の対応を決める要因となりうることを示唆された。先行研究で確認された認知及び感情的エンゲージメントの対照的な関係は限定的な範囲で、本研究においても確認された。

【スピーキング研究】

各クラスから得られたデータをもとに、変量効果モデルによる効果量の推定を行ったところ、

表2のような結果となった。

表2 ベイジアンメタ分析の結果

因子	事後平均	信用区間下限	信用区間上限	ベイズ因子
回避	-.29	-.06	-.51	3.75
不安	-.67	-.44	-.90	446.88
能力認知	-.70	-.48	-.92	1134.68

分析の結果、回避については、ベイズ因子の値が小さいことから、十分強い証拠が得られたとは言いが、その他の2つの因子については、指導の前後で抵抗感が低くなり、元研究の結果が再現されることが示された。

【リスニング研究】

メタ認知方略、認知方略についてのベイジアン回帰分析の結果は表3、4のとおりである。

表3 メタ認知方略におけるベイジアン回帰分析の結果

	事後期待値	事後標準偏差	信用区間下限	信用区間上限	Ř
切片	1.56	0.08	1.40	1.71	1.00
習熟度_高	-0.06	0.09	-0.24	0.13	1.00
題材_2	-0.01	0.07	-0.15	0.12	1.00
題材_3	-0.06	0.07	-0.20	0.08	1.00

表4 認知方略におけるベイジアン回帰分析の結果

	事後期待値	事後標準偏差	信用区間下限	信用区間上限	Ř
切片	1.90	0.07	1.76	2.03	1.00
習熟度_高	0.02	0.09	-0.16	0.19	1.01
題材_2	0.00	0.06	-0.11	0.11	1.00
題材_3	-0.09	0.06	-0.20	0.03	1.00

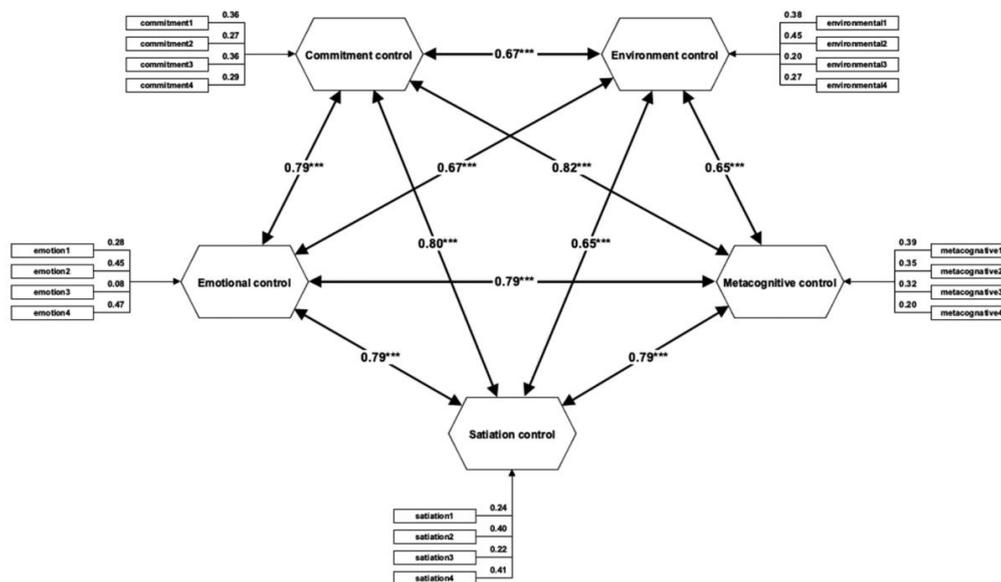
最後に、各方略を対象としてベイジアンネットワーク（ヒルクライム法）により、題材と習熟度の関連を調査した。その結果、題材の違いが推測や精緻化の方略に、熟達度が評価の方略に影響を及ぼしていることが推定された。

以上の結果から、Vandergrift (1997) が示した「第二言語の習熟度が高いほうがメタ認知的方略使用が多い」という結果は再現されないことが示された。

【学習方略研究】

CFA と CCA を比較した結果、適合度の点で CCA の方が優れていることが明らかになった(図1はCCAの結果のパス図)。これにより、CFA ではモデル適合度に問題があり、理論を支持する結果が得られなかったという制約を乗り越え、元々の SRCvoc の項目すべてを使用した追試が可能になった。その他の詳細な結果については、Alamer, Teng, and Mizumoto (2024) を参照のこと。

図1 CCAの結果

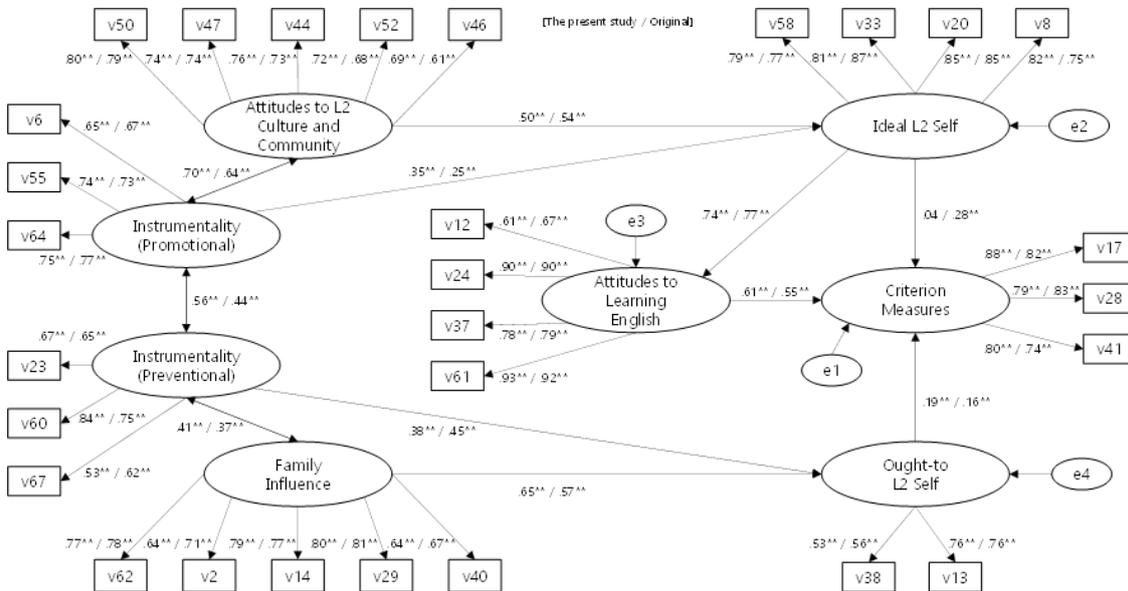


【動機づけ研究】

Integrativeness、ideal L2 self、ならびに criterion measures の相関係数、Instrumentality (promotion/prevention) と ideal/ought-to L2 self の相関係数について、Taguchi et al. (2009) と比較して、本追試研究でも各変数間にほぼ類似した相関関係が確認された。

つぎに、L2MSS を構成する 3 つの要素 (ideal L2 self、ought-to L2 self、L2 learning experience) 間の関連を検討するにあたっては、構造方程式モデリングによる多母集団の同時分析を行った。参考として、配置不変モデルの制約下で、Taguchi et al. (2009) と本論文のサンプルについて、それぞれ推定した値を入れたパス図が図 2 である。

図 2 配置不変モデルにおけるパス図



上記から明らかなように、概ね Taguchi et al. (2009) とほぼ同じ因子負荷量と回帰係数を示している。ただし、Ideal L2 Self→Criterion Measures の部分のみ、本研究では回帰係数が.04 であり、元論文の.28 より低く、非有意であった。以上のように、部分的には若干の違いが見られたが、全体としては再現に至ったと考えられる。

<引用文献>

- Alamer, A., Teng, M. F., & Mizumoto, A. (2024). Revisiting the construct validity of Self-Regulating Capacity in Vocabulary Learning Scale: The confirmatory composite analysis (CCA) approach. *Applied Linguistics*, amae023.
- 磯田貴道 (2009). 英語でのスピーキングに対する抵抗感の軽減. *JACET Journal*, 48, 53–66.
- Koltovskaia, S. (2020). Student engagement with automated written corrective feedback (AWCF) provided by Grammarly: A multiple case study. *Assessing Writing*, 44.
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, 82(4), 545–562.
- Mizumoto, A., & Takeuchi, O. (2012). Adaptation and validation of Self-regulating Capacity in Vocabulary Learning Scale. *Applied Linguistics*, 33, 83–91.
- Nation, I. S. P. (1983). Testing and teaching vocabulary. *Guidelines*, 5, 12–25
- Open Science Collaboration (2015). Estimating the reproducibility of psychological science. *Science*, 349 (6251), aac4716.
- Qian, D. D. (1998). *Depth of vocabulary knowledge: Assessing its role in adults' reading comprehension in English as a second language* [Unpublished doctoral dissertation]. University of Toronto.
- Qian, D. D. (2002). Investigating the relationship between vocabulary knowledge and academic reading performance: An assessment perspective. *Language Learning*, 52, 513–536.
- Soresi, S. (2005). SPM®: A new approach to achieving fluency. *Modern English Teacher*, 14, 39–43.
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese, and Iranian learners of English: a comparative study. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity, and the L2 self* (pp. 66–97). Multilingual Matters.
- Tseng, W., Dörnyei, Z., & Schmitt, N. (2006). A new approach to assessing strategic learning: The case of self-regulation in vocabulary acquisition. *Applied Linguistics*, 27, 78–102.
- Vandergrift, L. (1997). The comprehension strategies of second language (French) listeners: A descriptive study. *Foreign Language Annals*, 30, 387–409.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 13件）

1. 著者名 草薙邦広・鬼田崇作・巨理陽一	4. 巻 24
2. 論文標題 外国語教育研究の再現可能性：素朴な認識の拒絶と追求姿勢の擁護	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 179-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 巨理 陽一	4. 巻 70
2. 論文標題 英語教育研究のあたり前を見直す	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山森 光陽・岡田 涼・山田 剛史・巨理 陽一・熊井 将太・岡田 謙介・澤田 英輔・石井 英真	4. 巻 60
2. 論文標題 教育研究の知見の統計的統合は何をもたらすのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 192-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.60.192	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 In'nami Yo, Mizumoto Atsushi, Plonsky Luke, & Koizumi Rie	4. 巻 1
2. 論文標題 Promoting computationally reproducible research in applied linguistics: Recommended practices and considerations	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Research Methods in Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.rmal.2022.100030	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 鬼田崇作	4. 巻 103
2. 論文標題 混合効果モデルを用いた単語認知研究 (Kida, 2016) の再分析による頑健性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同志社大学英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/00029022	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 巨理 陽一	4. 巻 17
2. 論文標題 エンハンスメントとアダプテーション: デジタル・テクノロジーによる主体性の行方	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学の研究と実践	6. 最初と最後の頁 14-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24470/tpe.17.0_14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鬼田崇作	4. 巻 7
2. 論文標題 外国語の語彙習得: その理論と実践について考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 KELESジャーナル	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18989/keles.7.0_6	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井雄隆	4. 巻 35
2. 論文標題 データサイエンス時代の外国語教育研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mizumoto Atsushi	4. 巻 73
2. 論文標題 Calculating the relative importance of multiple regression predictor variables using dominance analysis and random forests	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Language Learning	6. 最初と最後の頁 161-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/lang.12518	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mizumoto Atsushi and Watari Yoichi	4. 巻 4
2. 論文標題 Identifying key grammatical errors of Japanese English as a foreign language learners in a learner corpus: Toward focused grammar instruction with data-driven learning	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asia Pacific Journal of Corpus Research	6. 最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.22925/apjcr.2023.4.1.25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Abdullah Alamer, Mark Feng Teng, & Mizumoto Atsushi	4. 巻 -
2. 論文標題 Revisiting the construct validity of Self-regulating Capacity in Vocabulary Learning Scale: The confirmatory composite analysis (CCA) approach	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/applin/amae023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Mark Feng Teng & Mizumoto Atsushi	4. 巻 -
2. 論文標題 Validation of metacognitive knowledge in vocabulary learning and its predictive effects on incidental vocabulary learning from reading	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 International Review of Applied Linguistics in Language Teaching	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.system.2024.103255	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Mark Feng Teng, Mizumoto Atsushi, & Takeuchi Osamu	4. 巻 -
2. 論文標題 Understanding growth mindset, self-regulated vocabulary learning, and vocabulary knowledge	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 System	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.system.2024.103255	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 巨理陽一	4. 巻 53
2. 論文標題 学校英語教育の目的論を再考する：社会的環境と構成的発達段階の視点から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 89-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 巨理陽一	4. 巻 53
2. 論文標題 スマート・イナフ・エデュケーションは可能か：教育DXの教育方法学的検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本教育法学会年報	6. 最初と最後の頁 66-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 鬼田崇作
2. 発表標題 外国語の語彙習得－その理論と実践について考える－
3. 学会等名 関西英語教育学会 (KELES) 2021年度 (第27回) 研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 巨理陽一
2. 発表標題 エンハンスメントとアダプテーション：外国語の授業づくりにおけるデジタルテクノロジーの可能性と課題
3. 学会等名 第57回日本教育方法学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 星野由子
2. 発表標題 リーディング：Qian (2002) の再計算
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第62回 (2023年度) 全国研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 磯田貴道・大和知史
2. 発表標題 スピーキング研究における追試
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第62回 (2023年度) 全国研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鬼田崇作
2. 発表標題 外国語教育研究における再現可能性の検証：ベイズ統計を用いた再分析・直接的追試・概念的追試
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第62回 (2023年度) 全国研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 草薙邦広
2. 発表標題 ベイズ統計による再現可能性の検証
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第62回 (2023年度) 全国研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Morita Mitsuhiro, Watari Yoichi, & Mizumoto Atsushi
2. 発表標題 What do you mean by “Do you like learning English?”
3. 学会等名 The 32nd Conference of the European Second Language Association (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山内優佳
2. 発表標題 リスニング研究：Vandergrift (1997) の概念的追試
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 (LET) 第62回 (2023年度) 全国研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 巨理陽一
2. 発表標題 英語教師が言語アセスメントについて知りたいことが知りたい: Kremmel & Harding (2020) に基づくパイロット調査
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関西支部メソドロギー研究部会2023年度第1回研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 巨理陽一
2. 発表標題 学校に通いながらのサイボーグ：英語とどう関わっていくか
3. 学会等名 第52回中部地区英語教育学会岐阜大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 巨理陽一
2. 発表標題 スマート・イナフ・エデュケーションは可能か：教育DXの教育方法学的検討
3. 学会等名 日本教育法学会第53回定期総会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Watari Yoichi, Morita Mitsuhiro, & Mizumoto Atsushi
2. 発表標題 What kind of skill-integrated language activities are effective in improving English proficiency?
3. 学会等名 The 32nd Conference of the European Second Language Association (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 巨理陽一・草薙邦広・寺沢拓敬・浦野研・工藤洋路・酒井英樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 220
3. 書名 英語教育のエビデンス：これからの英語教育研究のために	

1. 著者名 竹内理・水本篤（編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 434
3. 書名 外国語教育研究ハンドブック【増補版】 研究手法のより良い理解のために	

1. 著者名 Kida Shusaku	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 402
3. 書名 The type of processing-resource allocation (TOPRA) model. In W. Wong & J. Barcroft (Eds.), Routledge handbook of SLA and input processing.	

1. 著者名 Mizumoto Atsushi	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Applied Linguistics Press	5. 総ページ数 697
3. 書名 Developing and disseminating data analysis tools for open science. In L. Plonsky (Ed.), Open Science in Applied Linguistics.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	廣森 友人 (Hiromori Tomohito) (30448378)	明治大学・国際日本学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	山内 優佳 (Yamauchi Yuka) (40781365)	広島大学・外国語教育研究センター・准教授 (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	草薙 邦広 (Kkusanagi Kunihiro) (60782620)	県立広島大学・地域創生学部・准教授 (25406)	
研究分担者	磯田 貴道 (Isoda Takamichi) (70397909)	立命館大学・文学部・准教授 (34315)	
研究分担者	大和 知史 (Yamato Kazuhito) (80370005)	神戸大学・大学教育推進機構・教授 (14501)	
研究分担者	水本 篤 (Mizumoto Atsushi) (80454768)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	
研究分担者	星野 由子 (Hoshino Yuko) (80548735)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	徳岡 大 (Tokuoka Masaru) (80780642)	高松大学・発達科学部・講師 (36202)	
研究分担者	巨理 陽一 (Watari Yoichi) (90509241)	中京大学・国際学部・教授 (33908)	
研究分担者	石井 雄隆 (Ishii Yutaka) (90756545)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
サウジアラビア	King Faisal University			
中国	Macao Polytechnic University			
米国	Northern Arizona University			